

【追悼】『統計学』第89号 2005年9月)

高岡周夫先生を偲ぶ

伊藤陽一*

経済統計学会（当時は研究会）の創立時の呼びかけ人の1人であり、また『統計学』の第2号（1955年9月）の巻頭論文を著され、同時に2号以降5号まで編集者の1人であった高岡周夫先生が、2005年1月31日の呼吸不全のため91歳の生涯を終えられた。筆者は北海道大学の教養部時代に先生（非常勤）の授業を受け、その後、一時勤務先を同じにし、以後も長くお世話になった1人である。

1. 年譜

先生のご経歴は、以下のとおりである。1909（明治42）年、北海道大学第3代学長であり、日本の農政学・殖民学を中心に多面的に活躍された高岡熊雄氏の三男として札幌に生まれる。農学部教員が多く住む「桑園博士町」という洋風の文化的雰囲気の中で先生は幼少の時期過ごされていたはずである。旧制松山高校を経由されて、1932年に京都帝国大学経済学部卒業（経済学士）、指導教員は小島昌太郎と蜷川虎三。1938年に同大学大学院（経済統計学専攻）を修了される。1938～1945年に満州鉄道調査部調査研究員。軍属としてビルマ（現ミャンマー）で終戦を迎える。バンコックとコンタクトに2年弱抑留。1948年、北海道農業復興会議調査部長を経て、1951年に北海短期大学経済学科助教授。1952年に4年制大学への改組時に北海学園大学経済学助教授になり1958年に経済学部教授。1962年にG.v.マイヤーの研究で、北海道大学から経済学博士の学位を授与される。1989（平成元）

年3月に退職し名誉教授となる。

2. 研究業績

先生の研究は多岐にわたる（【業績目録は退職記念『経済論集』（北海学園大学）36巻3号（1989年）。なお、還暦記念号、同上17巻2号（1970年）もある。両号には本学会会員が多く寄稿している。主要部分は『経済統計論の基本問題』（産業統計研究社）1988年に所収】に収録されている）。以下先生のご研究のごく一端にふれる。

G.v. マイヤー研究 論文数も多く先生が主テーマとされた。日本のドイツ社会統計学研究が、蜷川の主たる検討対象であったマイヤー以後の後期社会統計学に傾斜していく時期に、蜷川理論と対比し、蜷川の批判的理解をふくめてのマイヤーの多面的検討である。叙述は、ケトレーとマイヤー、マイヤーと蜷川のそれぞれを、継承・同一性と、批判・相違点とで捉え、かつ疑問を慎重に提示する形である。例えば、マイヤーは、ケトレーの「社会物理学」とともに実質科学を求めながら、その平均人—確率適用=大数観察はきびしく限定した、こうしてマイヤーは、時と場所を限定した社会集団を対象とし、社会科学固有の方法とみた悉皆大量観察を基準において、社会科学性を強調する、しかし、マイヤーにも、さらには蜷川にも、統計的合法則性の追求を通じて大数観察的思考が残存する、あるいは、マイヤーは統計各論において人口統計学を描けても、実質内容のある経済統計学を展開できないでいる等を、先生は指摘されている。そして検討全体の基礎に、統計方法の技術性が持つ一般性とこれが歴史的認識にど

* 法政大学経済学部

〒194-0298 町田市相原町4342

法政大学日本統計研究所気付け

う貢献するか、あるいは技術性が政治的利用目的次第で如何様にも働く、といった問題意識をおかれている。ここから我々は、マイヤーと蜷川の関係だけでなく、今日的諸問題への幾つかの示唆をも得ることができる。

統計制度・行政と地方統計論 先生の筆致が迫力を帯びるのは、1970年代を背景にした統計制度と地方統計論である。すなわち、先生による戦後の統計改革評価は、一言でいうと、「統計制度が全国的基礎統計の整備確立という事業に集中されて、真に住民の要求に応える統計制度として確立されたものであったかどうか」という疑問・批判であった。先生は、ドイツの統計機構に範をとって発展してきた日本の統計制度について、戦後改革を戦中の軍事目的に沿った統計制度・行政との対比しながら、中央集権的官僚制度は根強く残存して、ライス報告ですら地方統計への疑問と懸念を指摘していたにもかかわらず、旧態依然のままであった、とされる。地方は自ら統計調査に関わりながら、全国統計発表後に自らの地方の統計について知るという矛盾、住民の統計への親近感を絶っているなどを指摘し、調査原票を地方特有の課題に応えるよう臨機応変に利用する途や調査票の地方自治体への移管など、今日なお興味ある提起をされていた。中央の統計動向や論議を北海道にそくして観察された上での指摘であり、地方統計を論ずるときに顧みられるべきものを持つ。

米価のパリティ計算を通じての数理形式主義批判 上記につながる先生の重要な作業が、敗戦後1940年代後半から1950年代はじめに北海道農業復興会議において取り組まれた米価計算法批判である。低米価を政治的に強制す

るため生産費調査を退けてアメリカから導入したパリティ計算へ向けられていた。目的や利用限界に無反省なまま、実は政治目的に使用された統計解析法の一つを具体的な社会的文脈の中で内容的に浮き彫りにして、先生の批判は厳しい。

3. 大学行政その他

第一に、満鉄時代の経験を背景に、1947年10月から北海道農業関係の調査研究機関の強化や創始に参加され、自らも調査活動等幾つかの責任ある職を勤められた。

第二に、1951年以降、短期大学にはじまる教員生活を48年間送られた。当初、短大教員は北海高校の職員室の一角に肩身の狭い形で場所を借り、いわば北海高校附属短期大学であったとの話をうかがったことがある。同大学はその後、大学拡張期を経て北海学園大学になり、北海道の私立大学として重要な位置を占めるにいたる。この大学では経済学部が歴史も古く中心学部であり、先生は北海学園大学の創始から拡張・安定・改革に関与され、見守ったことになる。この全過程で、高岡先生は、就職部長、経済学部長を勤められ、さらに学費値上げ反対の学生運動が高揚した68年と70年に学長代行（事務取り扱い）として非常なご苦勞を重ねられた。

第三に、この間、経済統計研究会（学会）の北海道支部を、直截な言動の内海庫一郎氏とともに、対照的に地道な姿勢で支援された。

大学行政等の激務に携わりながら真摯に研究を進められ、後進を見守っておられた先生の温厚なお姿を偲び、ご冥福を祈りたい。